

白鳥の記

小湊の白鳥とともに30年

畠山正光

私が白鳥保護観察に打込んで今日あるは、過去が原因をなしている。

それは、およそ50余年前に逆のぼるが、私は海軍出身であり、松江という特務艦でパラオ島を根拠地として、大正11・12年と2カ年間、東・西カロリン、マーシャル、マリアナ群島地帯の海底測量に従事したことがある。航海中、一時は絶滅を伝えられたアホウドリの大群に遭遇する事がたまたまあり、実に壮観なものであった。

以来軍をしりぞいて忘れともなく忘れ去っていたが、国鉄職員であった私は、海南島から帰還して間もなく国鉄の小湊埠頭工事に軍の挺身隊とともに火薬爆薬取扱経験者として工事局より出張を命ぜられた。当地に来て見て驚ろいたのである。日本にもこんな大きな鳥のいるすばらしい所があったのかと。その時、あのアホウドリのことを思い出し、「よし、これを守って行こう」と、かたく心に誓った次第である。

工事中止後、私は一人残って残務整理にあたっていたが、残務整理も終り、いよいよ引上げねばならない時期が近づいた。しかし、私は引き上げなかった。永年勤務パスも恩給も振り捨て、国鉄を円満退職して、白鳥のためにとこの地に残ったのである。

この地に出張して来たのは昭和19年の2月7日である。以来30余年、われながら今日まで良くぞやり通したものであると驚く次第である。

しかし、これまでには種々なる事柄が生じて、決して平穏ではなかった。戦後、アメリカ進駐軍の一般空将校によって度々白鳥の密猟が行なわれた。これに対して当時の県知事・津島文治氏が進駐軍司令官に対して抗議を申し込み中止させたこともあった。

また、ノリ養殖事業が始まり、白鳥の棲息地である遠浅の海域が必要になるにつれて、白鳥を邪魔物扱いにするようになっていた。雷電宮の使姫であると以前から大事にしていたのであるが、いまやその白鳥がじゃまになってきた。このため白鳥を守る畠山が憎くなり「叩いてしまえ、殺せ。」と夜襲を掛けられた。「今後も当部落の世話になって暮す気持があるならば白鳥から手を引け。」と迫害を受けたが、私は、「断じて白鳥の保護は止めない。」と、



〔小湊のオオハクチョウと畠山正光氏〕

断言した。

そのために部落から追放される結果となったが、そんな事に驚いてはいられなかった。

昭和30年に餌付けを志し、34年の12月に成功。以来苦しい生活の中から私費を投じて餌を購入し続け今日に至ったのである。寒風の中に立ち、海岸をさまよい歩き、馬鹿者よ、狂者と罵られつつ。

38年にICBPの加盟国会議が日本で開かれた折りに、小湊の白鳥を見ることを希望された方々もおられたとか、しかし、時間の関係もあり釧路のツルに負けた。

私が餌付けを志した昭和30年当時、浅所小学校の当時の斉藤校長先生が私とともに白鳥保護に専心されて観察班を編成した。現在の観察班の前身であり、創始者の功績は大であるのに、今は誰もそのことを口にする者はない。甚だ遺憾である。

30年頃から34・5年頃まで、私の記録が浅所小学校の観察班に行っているが、その後は独自で行なっている。

一口に30年といっても永いものであった。しかし、健在である限り、保護観察を今後も続けるであろう。

強 靱 さ の 証 明

ある白鳥家族の軌跡

本 田 清

今川文暁師が、私に書き与えてくださったことばに「魚に非ざれば魚の心は知らず、鳥に非ざれば鳥の跡を尋ねがたし。」というのがある。

過去20年間、あくこともなく白鳥を追い求めてきた私も、魚の心を理解するなどということは論外としても、白鳥の日常的な行動さえ実際にはなかなかつかみにくいことであった。

同志相ばかり日本白鳥の会を結成して5年、渡来シーズン中、毎月定時定点調査を実施し、全国数十カ所に及ぶ各渡来地での白鳥の様子もある程度はわかってきたが、これはごく微視的な点と点のなかの概況に過ぎず、最も知りたかった点から点までの行動の実態は、実のところ全くわからなかった。

しかし、IWRB(国際水禽調査局)方式による白鳥の首輪標識調査が普及してくるにしたがって全くあからさまに具体的な事実がわかりはじめた。

たとえば、これまで白鳥の家族の結束は固いとか、グループごとに行動をともにし、毎年同じ渡来地にやってくるとかいわれていたが、首輪標識調査による過去3シーズンのデータから見ると、必ずしも全部がそうではないことがわかってきた。そこで、ここに二つの白鳥家族の例をあげる。

1974年8月、ソ連の調査隊によってシベリヤのチュコト半島の営巣地で、巣立ち直前に着標された二腹の幼鳥は、10月はじめに南下したときには、それぞれ親鳥2羽、幼鳥5羽からなる二つのファミリーであった。

まず、A群の幼鳥5羽のうち4羽は、親鳥と思われる成鳥2羽とともに76年10月25日クッチャ